

日中接触場面の雑談における母語話者と非母語話者による 「バランスをとるための笑い」の分析 — 『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020 年版)』 を用いて —

宇佐美 まゆみ (国立国語研究所) †

張 未未 (早稲田大学大学院教育学研究科) ††

"Laughter to Balance" in Causal Conversations in Japanese-Chinese Contact Situations: By Using "BTSJ Japanese Natural Conversation Corpus with Transcripts and Recordings (2020)"

Mayumi Usami (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

Weiwei Zhang (Waseda University Graduate School of Education)

要旨

日常生活に頻繁に生じる笑いは、ポライトネスにもかかわり、対人コミュニケーション上、極めて重要である。本研究では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020 年版)』を用いて、日中接触場面の初対面・友人同士の雑談における「バランスをとるための笑い」(早川, 2000a)を、母語話者と非母語話者と比較した。その結果、①「バランスをとるための笑い」は、初対面会話では、母語話者のほうが多く、友人同士の会話では、非母語話者のほうが多い。②母語話者は、友人との会話より初対面会話において、「バランスをとるための笑い」が多いが、非母語話者は、友人との会話のほうに多い。③母語話者は、初対面会話において「自分の領域に属する内容」に言及する際、笑いが共起することが多いが、非母語話者は、初対面・友人同士いずれの場面においても、「相手領域に踏み込む際」に「バランスをとるための笑い」を共起させてポジティブ・ポライトネスを表していることなどが明らかになった。

1. はじめに

「笑い」は、社会生活を円滑に営む上で必要不可欠なパラ言語の一種である。社会的に組織された笑いは、話し手と聞き手双方が一緒に協働して紡いでいく会話の共創に貢献する(難波, 2017)。また、異文化コミュニケーションにおいては、摩擦を防ぐためのストラテジーとしても用いられることが予想される。本研究では、このような観点から、『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020 年版)』の中から、接触場面における初対面会話と友人同士の会話を選定し、それぞれの会話における母語話者と非母語話者の笑いの頻度や機能を比較した。また、その結果が、日本語教育にいかに関与するかを論じる。

2. 先行研究

日本語における笑いに関する研究には、笑いの機能の分類をし、その分類に基づいて実証的研究を行った一連の研究がある(早川 1995, 1997a, 1997b, 2000a, 2000b, 2001)。早川

† usamima@ninja.ac.jp

†† tyoumimi@fuji.waseda.jp

(2001) は、親疎・上下関係によってジャンル化される会話の中で、「仲間づくりの笑い」は親しい間柄（親親+親）、雑談、同年齢の者に対して多出するが、「バランスをとるための笑い」は普通の間柄、ミーティング、自分より年上の者に対して多出とした。文(2002) は、初対面会話における日本語母語話者による配慮としての笑いは、FTA を軽減するストラテジーとして機能しているとした。また、大津(2014) は、笑いは、親しい友人同士の雑談における対立行動において、それが「遊び」であることを相手に伝える機能を果たしているとし、ポジティブ・ポライトネスのストラテジーになっているとした。そのほか、笑いを取り上げた研究には、インタビューを対象とした池田(2003) やロールプレイを対象とした三宅(2011) などがある。

一方、異文化間コミュニケーションにおける笑いに関する研究は、村田・堀(2007)、笹川(2008)、宇佐美・張(2020) などがある。日英・日中接触場面における英語会話に見られる笑いに着目した村田・堀(2007) では、日本語・中国語母語話者は、英語母語話者と異なり、特に面白いとは思えない通常の陳述のあとに笑いを添えたり、それに対して笑いで応える場合があることなどを報告している。笹川(2008) は、日中・日米初対面の日本語会話における笑いを観察し、自己のフェイスを保持する「品行」に関わる笑い相手のフェイスを脅かさないことを示す「回避儀礼」に関わる笑いは日本語・英語・中国語母語話者に共通に見られたが、相手のフェイスを評価する「呈示儀礼」に関わる笑いのうち、「からかい」「感嘆」「祝福」「感謝」の笑いは日本語母語話者だけに見られ、英語・中国語母語話者には観察されなかったとしている。ただ、量的な側面には触れられていない。宇佐美・張(2020) では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス(2018年版)』の中の「コア会話」¹155 会話を対象に、まず、グローバルな観点から、母語場面、接触場面別に、初対面の会話と友人同士の会話における笑いの使用傾向を明らかにした。その結果、接触場面では、非母語話者のほうが母語話者よりも笑いが多く、母語話者、非母語話者ともに、笑いのタイプは、「仲間づくりの笑い」、「バランスをとるための笑い」、「覆い隠すための笑い」の順に多かったことなどが報告されている。異文化間コミュニケーションを扱った研究には、日本語母語話者と中国語母語話者の接触場面における日本語会話を扱ったものはまだ少ない。また、宇佐美・張(2020) では、大量のデータの全体的傾向を示しているが、その中の場面や相手、話者の違う会話において、笑いの機能が異なるのか否かなどの質的分析までは行っていない。

そこで、本研究では、宇佐美・張(2020) の定量的分析による全体的傾向を踏まえた上で、人間関係の潤滑油であり、文化によって違いが出やすいと予想される「バランスをとるための笑い」に焦点を当てて、母語話者と非母語話者による笑いの現れ方や機能に違いがあるかどうか等、その特徴について質的分析も交えて分析する。

3. 研究方法

本研究では、『BTSJ 日本語自然会話コーパス(2020年版)』を利用して、日中接触場面の雑談における母語話者と非母語話者の笑いを、「言語社会心理学的アプローチ」(宇佐美1999)、「総合的会話分析」(宇佐美2008, 2013, 2015)の方法論に基づき分析した。

¹ 「コア会話」とは、『BTSJ 日本語自然会話コーパス2018年版』の中の会話のジャンル(雑談)、場面(母語場面/接触場面)、話者の社会的属性(学生)、話者同士の面識の度合い(初対面/既知(友人)、話者関係(対同等)、性別(男男/女女/男女)に条件を統制して抽出した155会話である。

3.1 本研究に用いるデータ

『BTSJ 日本語自然会話コーパス (2020 年版)』の中から、以下の選定基準によって、接触場面における初対面会話と友人同士の会話データを選定した。

①接触場面における母語話者と非母語話者の初対面会話と友人会話における笑いの機能の特徴を分析するため、音声つきの会話であること。

②非母語話者の母語・日本語レベルも考慮に入れ、会話数の少ない接触場面の初対面会話の中では会話数の最も多い「上級話者の初対面会話 (女性同士)」8 会話に合わせて、友人同士の 15 会話から 8 会話を抽出した²。(非母語話者は、全員中国語 (台湾の国語を含む) を母語とする日本語学習者である。)

選定した全 16 会話³は、すべて女性同士による会話である。選定した 16 会話の総会話時間は 5 時間 20 分 48 秒⁴で、総発話文数は 6622 である。

3.2 分析方法

『基本的な文字化の原則 (BTSJ) 2019 年改訂版』(宇佐美, 2020) では、当該話者自身の笑い、相手が発話しているときの笑いを区別して文字化している。そのことを生かし、選定した 16 会話における笑いを、話者自身の「①発話時の笑い」と「②相手発話時の笑い」に分けて、それぞれの頻度と総発話文数に占める割合、及び、笑いの総数に占める割合を算出した。「<笑い>」や「<笑いながら>」などで表示されているものを「①発話時の笑い」とし、相手側の笑いであることを示すカッコ内に記された「(<笑い>)」を「②相手発話時の笑い」とした。「<2 人で笑い>」は、当該発話の話者による「①発話時の笑い」と相手話者による「②相手発話時の笑い」の両方としてカウントした。また、1 発話文中に笑いが複数回出現した場合、複数回とカウントした。なお、統計的処理は、SPSS(ver.26)を使用して行った。

宇佐美・張 (2020) では、話者の「①発話時の笑い」を対象に、以下の早川 (2000a) による笑いの分類に倣い、初対面会話、友人同士の会話別に、母語話者と非母語話者による「①発話時の笑い」のタイプを、大きくは、「A.仲間づくりの笑い」「B.バランスをとるための笑い」「C.覆い隠すための笑い」の 3 つに分類し、さらに下位項目を立てた合計 8 タイプ別に、コーディングを行った。

早川 (2000a) による笑いの分類

- | |
|--|
| A.仲間づくりの笑い : A-1.自分の楽しいと思うことに付加され、談話参加を促す笑い A-2.相手の考えを共有し、会話に参加する笑い A-3.共通の背景を確認する笑い |
| B.バランスをとるための笑い : B-1.自分の領域に属する内容に付加された笑い B-2.相手領域に踏み込むことに付加された笑い B-3.挨拶に付加された笑い |
| C.覆い隠すための笑い : C-1.言いたくないことを隠すための笑い C-2.反応の仕方がわからないための笑い |

² 15 会話の会話グループをグループ番号の逆順に並べて上から順に選定したものである。

³ 初対面 8 会話の通し番号は 279, 280, 281, 282, 283, 284, 285, 286 であり、友人同士 8 会話の通し番号は 142, 143, 144, 324, 325, 326, 327, 328 である。

⁴ 初対面 8 会話の 1 会話あたりの平均時間は 15 分 43 秒であり、友人 8 会話の 1 会話あたりの平均時間は 24 分 23 秒である。

本研究では、「②相手発話時の笑い」も考察対象に含め、母語話者、非母語話者によるすべての笑い 783 例を対象にコーディングを行った。

以下に、コーディングの具体例⁵を示す。

- 例 (1) —1 A 〈笑い〉(A-1)もうホンットにいい先生がいるのよねえ。
 —2 B ふーん
 —3 A それで、もう、うちの子供なんか、恋をしてる程大好きで、「だいしゅき、だいしゅき」とかゆっ 〈笑い〉(A-1)
 —4 B 〈笑い〉(A-2)かわいいー 〈笑い〉(A-2)
- 例 (2) —1 A でも、わたしなんか、なんか、あの、よくあるじゃないですか。お見合いの時に聞かれる、あれのような心境になって。 〈笑い〉(A-3)
 —2 B 興信所みたいなの。 〈笑い〉(A-3)
- 例 (3) —1 A Bちゃん、まだ22歳だっけ。
 —2 B 来年で 〈笑い〉(B-1)、23でーす。 〈笑い〉(B-1)
- 例 (4) —1 A じゃあ、この、点減ってゆうふうにこー、フアジーな表現がいいんじゃないですか。 〈笑いながら〉(B-2)
- 例 (5) —1 A あーそうですか。有り難うございます。 〈笑いながら〉(B-3)
- 例 (6) —1 A あるんですよ。いろいろと。
 —2 B はあ
 —3 A 〈笑いながら〉(C-1)いろいろと・・・
- 例 (7) —1 A だからそれがすけてんのよ。
 —2 B 〈笑い〉(C-2)
 —3 A もう、パンツ見える？

笑いのコーディングの結果の信頼性は、認定者2名が16会話の中から初対面会話と友人同士の会話1会話ずつを選択し、「評定者間信頼性係数(カッパ係数)」を求めた($k=.836$)。その後、評定が一致しなかった箇所については、認定者の間で合意を得るまで検討し、結果を定めた。

4. 分析結果

上記のコーディングの後、母語話者、非母語話者のタイプ別の笑いが、それぞれの笑いの総数に占める割合を初対面、友人の場面別に示していく。

4.1 母語話者と非母語話者による場面ごとの「①発話時の笑い」の頻度と割合

以下の表1-1に、初対面会話、友人同士の会話別に、母語話者と非母語話者の「①発話時の笑い」の頻度とそれが当該話者の総発話文数に占める割合を示す。

表 1-1 母語話者と非母語話者の「①発話時の笑い」と当該話者の総発話文数に占める割合

| 話者 | 初対面(8会話)：頻度(割合%) | | 友人(8会話)：頻度(割合%) | |
|-------|------------------|--------------|-----------------|--------------|
| | ①発話時の笑い | 当該話者の総発話文数 | ①発話時の笑い | 当該話者の総発話文数 |
| 母語話者 | 156(10.83) | 1440(100.00) | 129(6.63) | 1946(100.00) |
| 非母語話者 | 122(8.19) | 1491(100.00) | 180(10.32) | 1745(100.00) |

⁵ 用例は、早川(2001)の一部を改変したものである。

表 1-2 場面別「①発話時の笑い」の頻度

| 話者 | 初対面(8 会話) | 友人(8 会話) |
|-------|-----------|----------|
| 母語話者 | 156*** | 129*** |
| 非母語話者 | 122*** | 180*** |

*** : p<.001

表 1-3 話者別「①発話時の笑い」の頻度

| 場面 | 母語話者 | 非母語話者 |
|-----------|--------|--------|
| 初対面(8 会話) | 156*** | 122*** |
| 友人(8 会話) | 129*** | 180*** |

*** : p<.001

表 1-1 からわかるように、初対面会話においては、母語話者のほうが、非母語話者よりも笑いが多いが、友人同士の会話においては、非母語話者のほうが笑いが多い ($\chi^2(1)=11.525$, $p=.0006866$, $p<.001$) 表 1-2 参照)。また、母語話者は、友人同士の会話よりも初対面会話において笑いが多いが、非母語話者は、初対面会話よりも友人同士の会話における笑いが多い ($\chi^2(1)=11.525$, $p=.0006866$, $p<.001$) 表 1-3 参照) ということがわかる。つまり、初対面と友人の間、および、母語話者と非母語話の間の両方に 0.1%水準で有意差が認められた。

4.2 母語話者と非母語話者による場面ごとの「②相手発話時の笑い」の頻度と割合

次に、初対面会話、友人同士の会話別に、母語話者と非母語話者の「②相手発話時の笑い」の頻度と相手話者の総発話文数に占める割合を表 2 に示す。「②相手発話時の笑い」は、相手のターンの際に、相手の発話と重なった短い小声の笑いであり、相手の発話を聞いていることを示したり、相手の発話を促進する機能を果たしていると考えられる。

表 2 母語話者と非母語話者の「②相手発話時の笑い」の頻度と相手話者の総発話文数に占める割合

| 話者 | 初対面(8 会話) : 頻度(割合%) | | 友人(8 会話) : 頻度(割合%) | |
|-------|---------------------|--------------|--------------------|--------------|
| | ②相手発話時の笑い | 相手話者の総発話文数 | ②相手発話時の笑い | 相手話者の総発話文数 |
| 母語話者 | 50(3.35) | 1491(100.00) | 44(2.52) | 1745(100.00) |
| 非母語話者 | 53(3.68) | 1440(100.00) | 49(2.52) | 1946(100.00) |

表 2 からわかるように、初対面会話でも、友人同士の会話でも、母語話者と非母語話者の「相手が発話している際の笑い」の頻度と割合は、ほぼ同程度である。また、母語話者と非母語話者どちらも、友人との会話よりも、初対面会話のほうに笑いが多い傾向を示しているが、 χ^2 検定を行ったところ、統計的有意差は認められなかった。

以上のことから、「①発話時の笑い」については、母語話者は、初対面会話のほうに笑いが多く、非母語話者は、友人と話す際に、笑いが多いということが、明らかになった。この違いについては、次の 4.3 のタイプ別の笑いの結果や、質的分析によって、後に考察する。

「②相手発話時の笑い」については、母語話者、非母語話者ともに、初対面会話に多い傾向は示したものの統計的に有意ではなかった。ただ、総合すると、概して、母語話者は、初対面会話のほうに笑いが多いことがわかる。

4.3 母語話者と非母語話者による場面ごとのタイプ別「①発話時の笑い」の頻度と「①発話時の笑い」の総数に占める割合

ここでは、母語話者と非母語話者による「①発話時の笑い」のタイプを、大きくは、「A.

仲間づくりの笑い」「B.バランスをとるための笑い」「C.覆い隠すための笑い」の3つに分類し、さらに下位項目を立てた合計8タイプのタイプ別頻度と割合を表3-1、表3-2にまとめる。下位項目である8タイプの定義は次の通りである。なお、表3-1と表3-2では、冒頭の略称のみ記す。

- A-1.自分：自分の楽しいと思うことに付加され、談話参加を促す笑い
- A-2.相手：相手の考えを共有し、会話に参加する笑い
- A-3.共通：共通の背景を確認する笑い
- B-1.自分：自分の領域に属する内容に付加された笑い
- B-2.相手：相手領域に踏み込むことに付加された笑い
- B-3.挨拶：挨拶に付加された笑い
- C-1.隠し：言いたくないことを隠すための笑い
- C-2.戸惑い：反応の仕方がわからないための笑い

表3-1 初対面8会話における母語話者、非母語話者によるタイプ別「①発話時の笑い」の頻度と「①発話時の笑い」の総数に占める割合

| 話者 | A. 仲間づくりの「笑い」: 頻度(割合%) | | | B. バランスをとるための「笑い」: 頻度(割合%) | | | C. 覆い隠すための「笑い」: 頻度(割合%) | | ①「発話時の笑い」の 総数 |
|-------|---------------------------|---------------|-------------|-------------------------------|--------------|-------------|----------------------------|--------------|------------------|
| | A-1 自分 | A-2 相手 | A-3 共通 | B-1 自分 | B-2 相手 | B-3 挨拶 | C-1 隠し | C-2 戸惑い | |
| 母語話者 | 44 (28.21) | 47 (30.13) | 4 (2.56) | 44* (28.21) | 4* (2.56) | 9 (5.77) | 0 (0.00) | 4 (2.56) | 156 (100.00) |
| | 95 (60.90) | | | 57 (36.54) | | | 4 (2.56) | | |
| 非母語話者 | 30 (24.69) | 39 (31.97) | 4 (3.28) | 22* (18.03) | 8* (6.56) | 7 (5.74) | 1 (0.82) | 11 (9.02) | 122 (100.00) |
| | 73 (59.84) | | | 37 (30.33) | | | 12 (9.84) | | |

* : p<.05

表3-2 友人8会話における母語話者、非母語話者によるタイプ別「①発話時の笑い」の頻度と「①発話時の笑い」の総数に占める割合

| 話者 | A. 仲間づくりの「笑い」: 頻度(割合%) | | | B. バランスをとるための「笑い」: 頻度(割合%) | | | C. 覆い隠すための「笑い」: 頻度(割合%) | | ①「発話時の笑い」の 総数 |
|-------|---------------------------|---------------|-------------|-------------------------------|----------------|-------------|----------------------------|-------------|------------------|
| | A-1 自分 | A-2 相手 | A-3 共通 | B-1 自分 | B-2 相手 | B-3 挨拶 | C-1 隠し | C-2 戸惑い | |
| 母語話者 | 59 (45.74) | 39 (30.23) | 9 (6.98) | 12 (9.30) | 6* (4.65) | 3 (2.33) | 1 (0.78) | 0 (0.00) | 129 (100.00) |
| | 107 (82.95) | | | 21* (16.28) | | | 1 (0.78) | | |
| 非母語話者 | 72 (40.00) | 40 (22.22) | 8 (4.44) | 32 (17.78) | 25* (13.89) | 2 (1.11) | 0 (0.00) | 1 (0.56) | 180 (100.00) |
| | 120 (66.67) | | | 59* (32.78) | | | 1 (0.56) | | |

* : p<.05

表 3-1 と表 3-2 からわかるように、初対面会話でも、友人同士の会話でも、母語話者と非母語話者ともに、「①発話時の笑い」のタイプは、「A.仲間づくりの笑い」、「B.バランスをとるための笑い」、「C.覆い隠すための笑い」の順に多かった。また、雑談においては、場を和ませる「仲間づくりのための笑い」によって、ポジティブ・ポライトネスが表されていることがわかる。

次に、異文化間で違いが出やすいと予想した「B.バランスをとるための笑い」に注目する。表 3-1 からわかるように、初対面会話においては、母語話者のほうが、非母語話者よりも「自分の領域に属する内容」に言及する際の笑いが多く、非母語話者のほうは、母語話者よりも「相手領域に踏み込む際」の笑いが多く（(フィッシャーの正確確率検定, $p=.04997, p<.05$) 表 3-1 の網掛け部分参照)。一方、表 3-2 からは、友人同士の会話においては、非母語話者のほうが、母語話者よりも「バランスをとるための笑い」が多く（($t=-2.944, df=14, p<.05$) 表 3-2 の網掛け部分参照)、その中でも、「相手領域に踏み込む際」の笑いが多く（($t=-2.326, df=14, p<.05$) 表 3-2 の網掛け部分参照）ことが明らかになった。

また、母語話者は、友人同士の会話よりも初対面会話において「バランスをとるための笑い」が多いが、非母語話者は、初対面会話よりも友人同士の会話において「バランスをとるための笑い」が多いことがわかる（($\chi^2(1)=19.297, p=.00001119, p<.001$) 表 3-3 参照）。母語話者が、親しい間柄に対しては「仲間づくりの笑い」が多く、「バランスをとるための笑い」が少ないことが、早川（2001）で報告されているが、本研究でも同様の結果が得られた。それに対して、非母語話者は、親しい間柄との会話において「バランスをとるための笑い」が多いという結果は興味深い。

表 3-3 場面別 B タイプの「①発話時の笑い」の頻度

| 話者 | B.バランスをとるための「笑い」 | |
|-------|------------------|-------|
| | 初対面 | 友人 |
| 母語話者 | 57*** | 21*** |
| 非母語話者 | 37*** | 59*** |

*** : $p<.001$

表 3-4 場面別 B-1 タイプの「①発話時の笑い」の頻度

| 話者 | B-1 自分 | |
|-------|--------|-------|
| | 初対面 | 友人 |
| 母語話者 | 44*** | 12*** |
| 非母語話者 | 22*** | 32*** |

*** : $p<.001$

一方、母語話者は、初対面会話においてのほうが「自分の領域に属する内容」に言及する際の笑いが多く、非母語話者は、友人同士の会話においてのほうが「自分の領域に属する内容」に言及する際の笑いが多く（($\chi^2(1)=14.855, p=.0001161, p<.001$) 表 3-4 参照）。

以上のことから、母語話者は、初対面会話のほうで「自分の領域に属する内容」に言及する際、笑いが共起することが多いが、非母語話者は、初対面・友人同士いずれの場面においても、「相手領域に踏み込む際」に「バランスをとるための笑い」を共起させてポジティブ・ポライトネスを表していることなどが明らかになった。

4.4 母語話者と非母語話者による場面ごとのタイプ別「②相手発話時の笑い」の頻度と「②相手発話時の笑い」の総数に占める割合

最後に、表 4-1、表 4-2 に、初対面会話、友人同士の会話別に、母語話者と非母語話者に

よる「②相手発話時の笑い」のタイプ別頻度と割合をまとめる。表 3-1 と表 3-2 と同様に、下位項目は略称を用いて示す。

表 4-1 初対面 8 会話における母語話者，非母語話者によるタイプ別「②相手発話時の笑い」の頻度と「②相手発話時の笑い」の総数に占める割合

| 話者 | A. 仲間づくりの「笑い」： 頻度(割合%) | | | B. バランスをとるための 「笑い」： 頻度(割合%) | | | C. 覆い隠すため の「笑い」： 頻度(割合%) | | 「②相手発話時の笑い」の総数 |
|-------|---------------------------|---------------|-------------|-----------------------------------|-------------|-------------|--------------------------------|-------------|----------------|
| | A-1 自分 | A-2 相手 | A-3 共通 | B-1 自分 | B-2 相手 | B-3 挨拶 | C-1 隠し | C-2 戸惑い | |
| 母語話者 | 0 (0.00) | 46 (92.00) | 1 (2.00) | 2 (4.00) | 1 (2.00) | 0 (0.00) | 0 (0.00) | 0 (0.00) | 50 (100.00) |
| 非母語話者 | 47 (94.00) | | | 3 (6.00) | | | 0 (0.00) | | |
| 母語話者 | 0 (0.00) | 49 (92.45) | 2 (3.77) | 1 (1.89) | 0 (0.00) | 1 (1.89) | 0 (0.00) | 0 (0.00) | 53 (100.00) |
| 非母語話者 | 51 (96.23) | | | 2 (3.77) | | | 0 (0.00) | | |

表 4-2 友人 8 会話における母語話者，非母語話者によるタイプ別「②相手発話時の笑い」の頻度と「②相手発話時の笑い」の総数に占める割合

| 話者 | A. 仲間づくりの「笑い」： 頻度(割合%) | | | B. バランスをとるための 「笑い」： 頻度(割合%) | | | C. 覆い隠すため の「笑い」： 頻度(割合%) | | 「②相手発話時の笑い」の総数 |
|-------|---------------------------|---------------|-------------|-----------------------------------|-------------|-------------|--------------------------------|-------------|----------------|
| | A-1 自分 | A-2 相手 | A-3 共通 | B-1 自分 | B-2 相手 | B-3 挨拶 | C-1 隠し | C-2 戸惑い | |
| 母語話者 | 0 (0.00) | 39 (88.64) | 2 (4.55) | 0 (0.00) | 1 (2.27) | 2 (4.55) | 0 (0.00) | 0 (0.00) | 44 (100.00) |
| 非母語話者 | 41 (93.18) | | | 3 (6.82) | | | 0 (0.00) | | |
| 母語話者 | 0 (0.00) | 48 (97.96) | 1 (2.04) | 0 (0.00) | 0 (0.00) | 0 (0.00) | 0 (0.00) | 0 (0.00) | 49 (100.00) |
| 非母語話者 | 49 (100.00) | | | 0 (0.00) | | | 0 (0.00) | | |

表 4-1 と表 4-2 からわかるように、どちらの場面においても、「②相手発話時の笑い」は「相手の考えを共有し、会話に参加する」笑いが主であり、「①発話時の笑い」とは異なり、母語話者と非母語話者の間で違いは見られなかった。この相手の発話に貢献する「仲間づくりのための笑い」は、ポジティブ・ポライトネスの現れである。母語話者も非母語話者も、相手が発話している際の笑いが同程度であるということは、話し手と聞き手双方が協働して構築していく会話という相互作用に、聞き手として貢献する度合いは、母語話者、非母語話者に違いがないことを示しており、興味深い。

5. 「B. バランスをとるための笑い」の機能についての分析

4 節の分析結果により、「①発話時の笑い」における「B. バランスをとるための笑い」については、母語話者と非母語話者の間で違いがあることがわかった。本節では、この「バラ

ンスをとるための笑い」, その中でも母語話者と非母語話者の間に有意差が認められた「B-1.自分の領域に属する内容に付加された笑い」と「B-2.相手領域に踏み込むことに付加された笑い」に焦点を絞って, 具体的な会話例を見ながら考察していく。

その前に, 会話例に使用されている文字化方法である『基本的な文字化の原則 (BTSJ) 2019年改訂版』(宇佐美, 2020)の記号凡例を示しておく。

表5 本研究に用いられる会話例における BTSJ の記号凡例

| | |
|--------------------|---|
| 。 | [全角] 1 発話文の終わりにつける。 |
| * | 発話文が終了するごとに, 「*」を「発話文終了」セルに記入する。つまり, 発話文番号と発話内容中の句点「。」と「*」の数は必ず一致する。このように, 「発話文終了」と「発話内容」と2つのセルで二重に確認する。 |
| ? | 疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式になっていなくても, 語尾を上げるなどして, 疑問の機能を持つ発話には, その部分が文末(発話文末)なら「?。」をつける。倒置疑問の機能を持つものには, 発話中に「?,」をつける。 |
| < >{< } < >{> } | 同時発話されたものは, 重なった部分双方を<>でくくり, 重ねられた発話には, <>の後に, {<}をつけ, そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。また重ねた方の発話には, <>の後に, {>}をつける。 |
| [] | 文脈情報。その発話がなされた状況ができるだけ思いおこしやすくなるように, 研究者の覚え書きとして, 音声上の特徴(アクセント, 声の高さ, 大小, 速さ等)のうち, 特記の必要があるものなどを[]に入れて記しておく。 |
| () | 短く, 特別な意味を持たない「あいづち」は, 相手の発話中の最も近い部分に, ()にくくって入れる。 |
| < > | 笑いながら発話したものや笑い等は, < >の中に, <笑いながら>, <2人で笑い>などのように説明を記す。笑いが比較的是っきりと聞こえる場合は, 「はははは<笑い>」のように記す。笑い自体が何かの返答になっているような場合は1発話文となるが, 基本的には, 笑いを含む発話中か, その発話文の最後に記し, その後に句点「。」または英語式コンマ2つ「,,」をつける。 |
| (< >) | 相手の発話の途中に, 相手の発話と重なって笑いが入っている場合は, 短いあいづちと同様に扱って, (<笑い>)とする。 |
| # | 聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて, #マークをつける。 |
| 「 」 | [全角] トランスクリプトを公開する際, 固有名詞等, 被験者のプライバシーの保護のために明記できない単語を表すときに用いる。 |

5.1 「B-1. 自分の領域に属する内容に付加された笑い」についての分析

「B-1.自分の領域に属する内容に付加された笑い」は, 初対面会話においては, 母語話者が非母語話者よりも有意に多かった((フィッシャーの正確確率検定, $p=.04997$, $p<.05$)表3-1の網掛け部分参照)。母語話者による初対面会話における B-1 タイプの笑いの例を示す。

会話例1: 母語話者による「B-1.自分の領域に属する内容に付加された笑い」の例(初対面の会話)

| 会話の通し番号 | 会話グループ番号 | ライン番号 | 発話文番号 | 発話文継続 | 話者記号 | 発話内容 |
|---------|----------|-------|-------|-------|------|------|
| | | | | | | |

| | | | | | | |
|-----|----|----|----|---|--------|--|
| 280 | 20 | 35 | 34 | * | TFA012 | え、なに、将来は、スペイン？。 |
| 280 | 20 | 36 | 35 | * | JF136 | あー、最初はそう思ってたけどー(うん)、うん、ちょっと難しいかなーっと思って<笑い>。 |
| 280 | 20 | 37 | 36 | * | TFA012 | えーなんでスペイン語、スペイン語、好き？。 |
| 280 | 20 | 38 | 37 | * | JF136 | うん、好きです。 |
| 280 | 20 | 39 | 38 | * | TFA012 | ふーん。 |
| 280 | 20 | 40 | 39 | * | JF136 | あー私が昔1ヶ月ちょっと、アメリカにホームステイしたんですけど(ふーん)、その時の、ホストマザーが、あのースパニッシュだったんでー、(あー)それの、それをきっかけにしてー、(うん)なんとなく面白そうだなっていう感じ。 |
| 280 | 20 | 41 | 40 | * | TFA012 | ふーん、##、英語？。 |
| 280 | 20 | 42 | 41 | * | JF136 | 英語ーは、昔は一生懸命やってたけどー(うん)、大学入ってから全然やってなくて<笑い>、結局しゃべれない。 |
| 280 | 20 | 43 | 42 | * | TFA012 | そう。 |
| 280 | 20 | 44 | 43 | * | JF136 | うん。 |
| 280 | 20 | 45 | 44 | * | TFA012 | じゃ今、スペイン語はうまいでしょ？。 |
| 280 | 20 | 46 | 45 | * | JF136 | ううん<笑い>、そうでもない。 |
| 280 | 20 | 47 | 46 | * | JF136 | 普通に授業でやってー、(ふーん)で、アルゼンチンに1ヵ月ホームステイしてー、(んー)その時にちょっとだけ上達したんだけどー、また日本に帰ってきたら、戻っちゃった<軽い笑い>。 |
| 280 | 20 | 48 | 47 | * | TFA012 | あーそうですか、ふーん[ささやくように]。 |

母語話者 JF136 が相手の非母語話者 TFA012 に将来スペインに行くかどうかについて聞かれて、発話文 35 で、「難しいかな」と照れ笑いをしながら返答している。その後、英語について聞かれた時に、発話文 41 で、照れ笑いをしながら「全然やっていない」と謙虚に返答している。次に「スペイン語はうまいでしょ」と褒められた時に、発話文 45 で、照れ笑いをしながら「ううん」と否定し、発話文 46 で、照れ笑いをしながらその理由について述べている。初対面会話では、親しくない相手の前で、このように自分のことについて過小に評価することがしばしば行われる。こうした笑いは、笹川 (2008) によれば、初対面の日中・日米会話においては、日本人のほうが、中国人とアメリカ人よりも多く用いていたことが報告されているが、本研究でもそれが示された。

以上のことから、母語話者は、初対面会話においては、積極的に相手の領域に踏み込む発話よりも、恥や照れを表す笑いを伴いながら自己開示を行うことが明らかになった。日本語教育においては、日本語学習者にこのような文化的特徴について説明する必要があるだろう。

5.2 「B-2. 相手領域に踏み込むことに付加された笑い」についての分析

相手の領域に踏み込む際に使用される B-2 タイプの笑いは、相手の領域に踏み込むことによる FTA を軽減する効果がある。4 節の分析結果から、初対面会話においても友人同士の会話においても、非母語話者のほうが母語話者よりも相手の領域に踏み込む際に使用される B-2 タイプの笑いが有意に多い (初対面会話：フィッシャーの正確確率検定, $p=.04997$,

p<.05 (表 3-1 の網掛け部分参照) , 友人同士の会話 : $t=-2.326, df=14, p<.05$ (表 3-2 の網掛け部分参照)) ということがわかった。これは、非母語話者のほうが、そもそも相手の領域に踏み込む発話が多いということも示している。非母語話者による「B-2.相手領域に踏み込むことに付加された笑い」の例を、初対面場面 (5.2.1), 友人場面 (5.2.2) の順に示す。

5.2.1 初対面会話における「B-2. 相手領域に踏み込むことに付加された笑い」の用例

まず、初対面会話における非母語話者の「B-2.相手領域に踏み込むことに付加された笑い」の例を、以下に示す。

会話例 2 : 非母語話者による「B-2.相手領域に踏み込むことに付加された笑い」の例 (初対面の会話)

| 会話の通し番号 | 会話グループ番号 | ライン番号 | 発話文番号 | 発話文継続 | 話者記号 | 発話内容 |
|---------|----------|-------|-------|-------|--------|--------------------------------|
| 286 | 20 | 275 | 271 | * | JF138 | それも北京にある?。 |
| 286 | 20 | 276 | 272 | * | CFA005 | 北京にある、うん。 |
| 286 | 20 | 277 | 273 | * | JF138 | へえー。 |
| 286 | 20 | 278 | 274 | * | JF138 | えー知らなかった。 |
| 286 | 20 | 279 | 275 | * | CFA005 | えっ[驚いたように]?。 |
| 286 | 20 | 280 | 276 | * | JF138 | うん。 |
| 286 | 20 | 281 | 277 | * | CFA005 | 説明し、説明、私が説明しているのが間違えているかもしれない。 |
| 286 | 20 | 282 | 278 | * | JF138 | ううん、でも、全然知らないから。 |
| 286 | 20 | 283 | 279 | * | CFA005 | 知らないの<笑い>?。 |
| 286 | 20 | 284 | 280 | * | CFA005 | 清華の方が有名ですよ<軽い笑い>。 |
| 286 | 20 | 285 | 281 | * | JF138 | そうなんだ(んー)。 |
| 286 | 20 | 286 | 282 | * | JF138 | え、他に中国で有名な大学って?。 |

非母語話者 CFA005 が、相手の母語話者 JF138 に北京にある有名な大学について話している。母語話者 JF138 に発話文 278 で「知らない」と言われ、発話文 279 と 280 で、笑いながら相手の領域に踏み込んで、相手の無知さについて言及するという FTA (フェイス侵害行為) を行っている。初対面の相手であるにもかかわらず、このような相手のフェイスを侵害する一種の「からかい」の発言をしているが、そこには、FTA 軽減行為として、笑いが伴われていることがわかる。

5.2.2 友人同士の会話における「B-2. 相手領域に踏み込むことに付加された笑い」の用例

次に、友人同士の会話における非母語話者による「B-2.相手領域に踏み込むことに付加された笑い」の例を示す。

会話例 3 : 非母語話者による「B-2.相手領域に踏み込むことに付加された笑い」の例 (友人同士の会話)

| 会話の通し番号 | 会話グループ番号 | ライン番号 | 発話文番号 | 発話文継続 | 話者記号 | 発話内容 |
|---------|----------|-------|-------|-------|--------|--|
| 325 | 22 | 597 | 577 | * | CFA007 | でも「JF177 苗字」さんも、英語のほうは<すごくうまいでしょう>{<}<。} |
| 325 | 22 | 598 | 578 | * | JF177 | <え、もう全然できない、できない>{>}できない。 |
| 325 | 22 | 599 | 579 | * | CFA007 | 謙虚しちゃだめだよ<笑い>。 |
| 325 | 22 | 600 | 580 | * | JF177 | 違う、本当にできない、勉強しないと大変、大変。 |

母語話者 JF177 が、非母語話者 CFA007 の英語力に関する質問に対して、発話文 578 で「できない」と謙虚に返答している。それに対して、非母語話者 CFA007 が発話文 579 で、相手の母語話者 JF177 の領域に立ち入る形で、「謙虚しちゃだめだよ」と促している。相手と打ち解けた関係にあるからこそ、このような「相手領域に踏み込む」発話が多いと考えられる。ただし、そこには、笑いが共起しているのである。

このように、非母語話者（ここでは、中国語母語話者）は、「相手領域に踏み込む」発話、母語話者に比べて有意に多いが、そこには、笑いが共起し、ポジティブ・ポライトネスを表している。ただ、「相手領域に踏み込む」発話は、場合によっては、相手の誤解を招いてしまう危険性もある。異文化間コミュニケーションの観点からは、母語話者にも、このような異なる文化背景を持つ非母語話者の「会話スタイル」を知ってもらうことが重要であろう。

6. おわりに

本研究では、日中接触場面の雑談における母語話者・非母語話者による笑いの使用傾向を定量的分析で明らかにした上で、「バランスをとるための笑い」が、初対面会話と友人同士の会話で、それぞれどのように使われているのかを考察した。その結果、①「バランスをとるための笑い」は、初対面会話では、母語話者のほうが多く、友人同士の会話では、非母語話者のほうが多い。②母語話者は、友人との会話より初対面会話において、「バランスをとるための笑い」が多いが、非母語話者は、友人との会話のほうに多い。③母語話者は、初対面会話において「自分の領域に属する内容」に言及する際、照れ笑いのような笑いが共起することが多いのに対して、非母語話者は、初対面・友人同士いずれの場面においても、「相手領域に踏み込む際」に FTA を軽減する「バランスをとるための笑い」を共起させて、ポジティブ・ポライトネスを表していることなどが明らかになった。本研究の結果、日本語母語話者の笑いとは非母語話者の笑いの生起箇所やその機能には大きな違いがあることが明らかになった。今後、日本語教育や異文化間コミュニケーション教育に生かすべき示唆が得られたと言える。

今後は、女性同士の雑談会話に見られる笑いにとどまらず、性差や上下関係なども考慮に入れて、異文化間コミュニケーションにおける笑いの実態を探っていきたい。

謝 辞

本研究は、国立国語研究所「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」サブ・プ

プロジェクト（リーダー：宇佐美まゆみ），および JSPS 科研費 18H03581「語用論的分析のための日本語 1000 人自然会話コーパスの構築とその多角的研究」（研究代表者：宇佐美まゆみ）の成果の一部である。

また，統計処理に際しては，国立国語研究所の山崎誠氏に協力を得た。心より感謝申し上げます。

引用文献

- 池田智子(2003). 「日本語対面状況における笑いの構造と機能」『社会言語科学』, 6:1, pp.52-60.
- 宇佐美まゆみ(1999). 「談話の定量的分析—言語社会心理学的アプローチ—」『日本語学』, 18:11, pp.40-56.
- 宇佐美まゆみ(2008). 「相互作用と学習—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」西原鈴子・西郡仁朗(編)『講座社会言語科学 第4巻 教育・学習』, pp.150-181, ひつじ書房.
- 宇佐美まゆみ(2013). 「会話データの作成・分析—『総合的会話分析』と『基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)』」『日本語学』, 32:14, pp.132-147.
- 宇佐美まゆみ(2015). 「『総合的会話分析』の趣旨と方法—量的分析と質的分析の必然的融合—」特集「日本語教育の研究手法—『会話・談話の分析』という切り口から—」『日本語教育』, 162:0, pp.34-49.
- 宇佐美まゆみ(2020). 「『基本的な文字化の原則 (BTSJ) 2019年改訂版』」宇佐美まゆみ(編)『自然会話分析への語用論的アプローチ』, pp.17-42, ひつじ書房.
- 宇佐美まゆみ・張未未(2020). 「雑談における母語話者と非母語話者の笑いの使用傾向の分析—『BTSJ 日本語自然会話コーパス 2018年版』を用いて—」『日本語学会 2020年度春季大会予稿集』, pp.245-250.
- 大津友美(2014). 「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス：『遊び』としての対立行動に注目して」『社会言語科学』, 6:2, pp.44-53.
- 笹川洋子(1997). 「儀礼行為としての『笑い』：電話会話にみられる笑いを手がかりとして」『親和国文』, 32, pp.84-109.
- 笹川洋子(2008). 「異文化コミュニケーションに現れる笑いのモダリティ調節について」『神戸親和女子大学言語文化研』, 2, pp.29-52.
- 難波彩子(2017). 「会話の共創で起こる笑いの一考察—リスナーシップ行動を中心に—」『日本語学』, 36:4, pp.164-176.
- 早川治子(1995). 「日本人の『笑い』の談話機能」『言語と文化』, 7, pp.99-110
- 早川治子(1997a). 「日本人の『笑い』の談話機能—2—：出現率と場面」『言語と文化』, 9, pp.97-109.
- 早川治子(1997b). 「『笑い』の意図と談話展開機能」現代日本語研究会(編)『女性のことば・職場編』, pp.175-196, ひつじ書房.
- 早川治子(2000a). 「相互行為としての『笑い』—自・他の領域に注目して—」『文学部紀要』, 14(1), pp.23-43.
- 早川治子(2000b). 「自然言語データにおける『笑い』の数量的基礎分析」『言語と文化』, 12, pp.38-64.
- 早川治子(2001). 「『笑い』の分類に基づく数量的分析」『文学部紀要』, 14:2, pp.1-24.

- 文瑞蘭(2002). 「日本語母語話者の初対面会話における笑いについてー『配慮』につながる
ポライトネス・ストラテジーとしての笑いを中心にー」『日本語学研究』, 5, pp.33-51.
- 三宅和子(2011). 「談話の中の『笑い』と話者の内的フッティング：スクリプトにない『笑
い』の出現を手がかりに」『文学論藻』, 85, pp.134-116.
- 村田和代・堀素子(2007). 「異文化間コミュニケーションにおける『笑い』の機能につい
て」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』, 9, pp.115-124.

関連 URL

『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2020 年版』

https://ninjal-usamilab.info/lab/btsj_corpus/

「基本的な文字化の原則（BTSJ：Basic Transcription System for Japanese）」

https://ninjal-usamilab.info/lab/about_btsj/background/